

富士紀行（76） 同好の士よ、来たれ！（H13/6/27 記）

須走は相変わらず霧の中である。御殿場から須走を眺めたら雲にすっぽり覆われているのだろう。雲と霧は空中に浮かんだ無数の微少な水滴（霧粒）と言うことでは同じものであるが、雲のうち地面付近に生じたものを霧と称している。洗濯物は乾かないし、直ぐに黴びるのには閉口する。

陸上自衛隊の各駐屯地ではそれぞれ文化・運動部の同好会活動が盛んである。基本的には課業終了後か土・日・祝祭日等に相集いて練習をしたり、対外試合に出たりしている。厚生活動の一環としての剣道、バスケットボール等12種目については、全自衛隊大会も開催されて訓練の合間に鍛えた成果を競っている。

富士駐屯地で現在活動している同好会即ち登録されているクラブは、30にのぼり、700名余りの隊員がスポーツで汗を流し、文化的活動でセンスを磨いている。スポーツクラブが圧倒的に多いのは、男性が多いからであろうか。

同好会活動の主役（と言うと他のクラブの諸官に怒られるかも知れないが・・・）を挙げるとすれば、先ず、女性がいるにも拘わらず「音鼓衆（おとこしゅう）」と言われる駐屯地太鼓同好会であろう。

● 富士駐屯地太鼓同好会「駿河國 音鼓衆」

一昨日（6/24）、小山町金太郎ホールで、ファミリーコンサートが開催され、音楽隊の演奏もさることながら、一際、富士駐屯地太鼓同好会の演奏する「剣の舞」が会場一杯の聴衆を魅了した。同同好会は、昭和62年11月須走彰徳山林会の協力により発足、「鼓童」と言うプログループ（全国各地の色々な流派を取り入れた太鼓のプロ集団）の流れを受け継いでいる。特科教導隊の太鼓チームを核として、戦車教導隊や団本部付隊に拡大し、富士教導団富士駐屯地の太鼓隊に発展、現在に至る。

太鼓はリズム感が必要であるのは当然だが、それにも増して体力が必要である。更には、演奏が土・日曜日に集中し、家族との団欒や友人との交流もままならない、公務ではないボランティア活動であるので、代日休養が貰えるわけではない。そして自分の本来の職務がどんどん溜まってくるばかりだ（S1曹は土日に出勤して溜まった仕事を片づけているという）。これでは、生半可な気持ちではつとまるまい。

昨春には部員が数名になったというのも領けないわけではない。ここに太鼓隊中興の祖も言うべき隊員がいた。現会長のS1等陸曹が、存亡の危機にあったのを、昨年春新人10名を勧誘獲得して、16名の部員に迄拡大。

全くの素人が聴衆を前にして演奏出来るようになるまでは血の滲むような訓練が必要

であった。1730頃から2000頃、乗ってくれば2200頃まで、激しい訓練が続いた。その成果が現れ、現在では駐屯地の各種行事に欠かせない存在にもなっており、近郊各地のイベントやお祭りに引っ張りだこである。顧問のB1曹と会長のS1曹は、奈良東大寺に於いて、世界の超一流のミュージシャンと共演した経験を有している。

勇壮で腹にズシーンと響く和太鼓は、大地を揺さぶり、そこに日本人の魂そのものを感じるのは小生のみではあるまい。



参考までに、太鼓の皮は寿命10年と言われているが、このグループの太鼓は、既に13年経過しているにもかかわらず、故障もなく現在に至るも素晴らしい音を奏でている。それは偏に「A太鼓店」という石川県松任市にある製造元の職人の腕による。（因みにプロの殆どが「A太鼓店」謹製の太鼓を使用している。）彼等が保有している最も大きな太鼓は、「長胴3尺8寸大太鼓」である。日本には沢山の太鼓があるが、3尺8寸の大太鼓は、太鼓職人曰く「良い音質の太鼓という観点からは、限界の大きさ」なのだそうである。

又彼等が使用している「バチ」は、朴（ほう）又は桧で、十分に乾燥した専用の材を太鼓店から購入している。バチの重さは500～600g、直径5cmで、グリップは自分で握りやすいように削るそうだ。

彼等は、「自分達は、課外に練習して、ここまでなったんだ」というプライドを持って演奏している。素晴らしいことではないか。喝采！

何故か4名を除き独身者だそうだ。最良の伴侶を求めている？

（参考：厚生課資料、妹尾1曹談等）